



TITLE:

日本一のクラゲ天国田辺湾(99) カ  
ニウミヒドラ

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. 日本一のクラゲ天国田辺湾(99) カニウミヒドラ. 紀伊民報  
2013

ISSUE DATE:

2013-06-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180219>

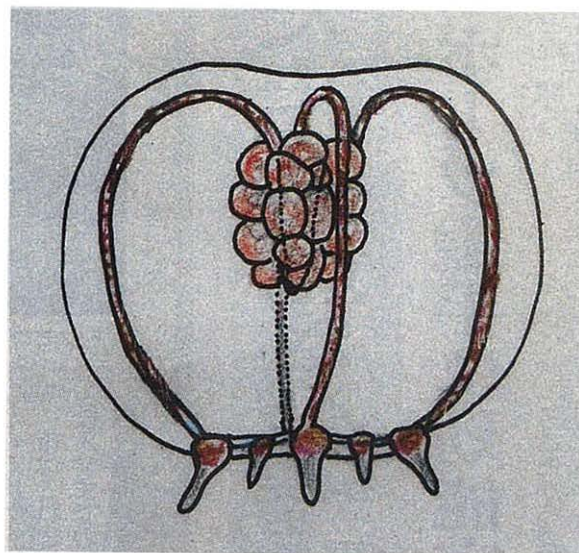
RIGHT:

© 紀伊民報社

# 紀伊民報

2013年(平成25年)6月19日 水曜日 (10)

## カニウミヒドラ



退化的で短命なカニウミヒドラのクラゲ  
(Uchinomi 1939改写)

久保田 信

99



カニウミヒドラは、クラゲ時代がとても短いため、一生のうちで優勢であるポリプ時代の名前が付けられている。和名が示す通り、カニの甲

羅にヒドラのようなポリプが付着している。そのポリプから小さなクラゲがたくさん繁殖する。みなべ町で水揚げされる世界最大の「タカアシガニ」の腹部上にポリプが付着しているのを、京都大学瀬戸臨海実験所の内海富士夫先生が発見された。そして、遊離した成熟クラゲとともに、1939年に新種として記載された。カニウミヒドラはその複雑な群体性のポリプと対比して、クラゲの方はハネウミヒ

ドラやカイヤドリヒドラクラゲと同様に、ごくごく単純な形態をしている。触手はあるが餌を捕らえることはない。傘径0・7ミリの縁に規則正しく、8本のごく短い触手らしきものが備わっている。そのうちの4本は他の4本よりさらに短い。口は開いておらず、餌を食べられないし、その必要もない。

クラゲの役割として大切な有性生殖を貫徹できれば、本種として生まれた意義は事足りる。つまり、クラゲとしてこの世に生まれたら、子孫つくりを迅速に行うのである。生殖巣は短い口柄(こつへい)の周りにできていて、雌雄のクラゲはそれぞれ卵と精子を海中に放出して、受精卵をつくらう。寿命が尽きる。

縁膜があるので少しは遊泳でき、雌雄のクラゲがなるべく接近して交配の効率を上げるのである。しかし、いついつの間帯にクラゲはポリプから遊離し、有性生殖を実践するのは未知である。

(京都大学准教授)